

加藤周一著作集



1

加藤周一著作集

文学の擁護

加藤周一 編集

平凡社

加藤周一著作集1 (全15卷)

文学の擁護

一九七九年二月二〇日 初版第一刷発行

著者 加藤周一^{かとうしゅういち}

装幀 池田満寿夫

発行所 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

〒一〇二 東京都千代田区四番町四

電話 〇三(二六五)〇四五一

振替 東京八二九六三九

印刷 明和印刷株式会社

製本 和田製本工業株式会社

定価 一八〇〇円

© 加藤周一 1979

Printed in Japan.

製本不良本はお取替え致しますので小社サービス課までお送り下さい(送料小社負担)。

目

次

I

文学の擁護

5

文学の概念

53

文体について

82

II

文藝時評一九七七

137

III

フランソワ・ラブレールとユマニスム

249

ラ・フォンテーヌとボワロー

256

コンデイヤックの『感覚論』に就いて

263

浪漫主義の文学運動

276

信仰の世紀と七人の先駆者

309

IV

象徴主義的風土

329

ボードレールに関する講義草案

363

ピエル・ルイス頌

382

ジュール・ラフォルグ

390

詩人の態度

398

ジャン・コクトー

409

ポール・ヴァレリー

418

あとがき

431

初出一覧

434

加藤周一著作集 1

文学の擁護

I

文学の擁護

——狭義の文学概念から広義の文学概念へ——

文学概念の比較文化的考察

「文学」という概念の定義のし方は、定義する側の立場によってちがう。その立場は、同じ文化のなかでも、時代によって異なる。たとえば徳川時代の儒者の「詩文」と、今日の日本の国文学者の考える「文学」の内容は、重ならない（「文学」という言葉は、徳川時代にもあって、全く別の意味をもっていた。ここで問題にするのは、文学という「言葉」の意味ではなくて、今日われわれが漠然とその言葉であらわそうとする「概念」の内容である）。また同じ文化の同じ時代にも、個人による定義のちがいがあり得るし、現にあった。たとえば日本の一八世紀に、宣長と儒者たちは、別のし方で文学概念を定義していたといえるだろう。

理論的には必ずしも過去の文学作品を基礎としないで文学を定義することができる（たとえば

第一次大戦中の「ダダ」。しかし特定の社会で広く行われている文学の概念は、それぞれその社会の文学的遺産（過去の作品、つまるところ文学史）を背景とする。しかるに文学的遺産の内容は、社会と言語がちがえば、著しくちがうのが普通であるから、文学概念の定義もまたちがって来るのである。いま同じ文化のなかで、時代による文学概念の変遷を辿ることを、歴史的な考察（通時的接近）とよぶとすれば、同じ時代の異なる文化のなかでの文学概念の比較は、比較文化的な考察（同時的接近）といえるだろう。ここで私が試みようとするのは、後者である。

われわれの時代の文学の状況を叙述するためには、——つまり現代の立場からみれば、どういう文学概念がもっとも便利であるか。私の目的は、その問いに答えるのに、比較文化的な考察を役立てたいということである。別の言葉でいえば、私はこの文章において、いきなり新しい文学概念を定義しようとしているのではなく、現在すでに広く行われているいくつかの定義のなかから一つを選択し、それに再解釈を加えようとするのである。そういう目的のためには、対象とする文化乃至言語が、包括的である必要はない。われわれにとって係りの深いところの、いわば戦略的に重要な少数の文化を考察すれば、目的に適うであろう（対象とする文化乃至言語を限るのには、もちろん、実際的な理由もある。その一つは、時間と紙面の制限である。しかしそれ以上に、もう一つは、私の読むことのできる言語が著しく限られていることである。文学を語るには、その言葉を知らなければならぬ。いま私がロシア文学の例を引かないのは、それが重要でないと考えるからではなく、ロシア語を読まないからである）。

今日広く用いられている文学の概念は、ヨーロッパの大陸型と英米型とに大別できるだろうと私は考える。大陸型とここでいうのは、主として仏（独）語の文学として一般にみとめられている作品の範囲が示唆するところの文学概念を指す。その英（米）に広く通用する文学概念との主要なちがいは、散文作品の範囲に係る（韻文または詩は、いかなる時代のいかなる代表的文化も、そのすべてを文学とする。したがって文学の概念の定義を比較するときに、詩を問題にする必要は少いのである）。簡単にいえば、大陸型は広く、英米型は狭い。

近代のフランス文学史は、周知のように、一六世紀の散文作品の双璧として、ラブレール *Rabelais* の『ガルガンチュアとパンタグリユエルの物語』と、モンテーニュ *Montaigne* の『エッセー』を挙げる。前者は、空想の物語であるという点で、一九世紀の小説に似ているが、また多くの点でちがう。その一つは、同時代の学問の諷刺として、高度に抽象的で煩瑣な議論のパロディーを含むということである。もう一つは、主人公の心理の細かい描写を欠くということである。興味の中心の一つが全く知的抽象的であるという点で、たとえば『赤と黒』の興味の中心が、主人公の心理と感情生活にあるのとは、対照的である。いま『赤と黒』を小説の典型とし、小説を文学の中心とする文学概念によれば、ラブレールの大作は、傑作でもないし、時代の代表作でもないということになる。逆にラブレールの大作を一六世紀文学の代表的傑作とする文学概念は、小説を文学の中心におかぬか、小説の典型を『赤と黒』としないかのどちらかでなければならぬ。他方、『エッセー』もまた、日本のいわゆる「随筆」とはちがって、文藝・風俗・歴史・倫理・哲学など

に係る多くの話題を、しばしば挿話を引きながら、叙述し、分析し、推論する。それはたとえば『徒然草』のように推論を避けて断片的感想を連ねるのではなく、議論の展開であり、意見の主張である。強いて日本語の作品に例をもとめれば、『徒然草』よりもはるかに『正法眼蔵』にちかいだろう（モンテーニュの「ラティニスム」と、道元の散文へのシナ語の影響との間にも、似たところがある）。その『エッセー』が、一六世紀の、またさらにフランス文学一般の、代表的作品である。

大陸型文学概念は、一七世紀からどういう種類の散文を採って、フランス文学の黄金時代としてきたのか。散文の劇（モリエール Molière）もあり、一種の心理小説（ラ・ファイエット La Fayette 夫人）もある。しかしその圧倒的な部分は、散文劇でもなく、小説でもなく、高度に抽象的な学問の方法論であり（デカルト Descartes）、哲学的な護教論や神学上の弁論であり（パスカル Pascal）、僧侶の説教や追悼演説（ボシユ Bossuet）であり、世界史であり（フェヌロン Fénelon）、政治家の回想録であり（サン・シモン Saint-Simon）、人間性に関する一般的考察であり（ラ・ブリュイエール La Bruyère, ラ・ロシュフコー La Rochefoucauld）、母親の娘にあてた手紙（セヴィニエ Sévigné 夫人）である。このような散文作品によって定義される文学の概念は、その内容の領域が途方もなく広く、ありとあらゆる話題に渉る。話題の種類は、文学を定義しない。またいわゆる「ジャンル」（詩、劇、小説、文藝批評、藝術的随筆）も、文学を定義しない。殊に作り話 fiction であることは、文学の本質と関係がない。哲学・神学・説教・歴史・私的書簡のあらゆる

形式の散文が、文学であり、しかも一時代の代表的な文学なのである。このような例は、一八世紀のフランス文学についても挙げる事ができる（ヴォルテール Voltaire, ルソー Rousseau, モンテスキュー Montesquieu, デイドロ Diderot）。また小説の黄金時代であった一九世紀についてさえも、ある程度までは同じことがいえるだろう（ミシュレー Michelet, ルナン Renan, 文藝時評家としてのではなくジャンセニスムの史家としてのサント・ブーヴ Sainte-Beuve など）。

しかし文学を、内容も、「ジャンル」も、定義しないとすれば、何が定義するのか。フランス文学の場合には、文体、または散文の質である。よいフランス語で書かれた文章は、高度に技術的な神学論争であろうと、母親の娘にあたえた日常身辺の注意であろうと、すべて文学である。博物誌でさえも、政治的論文でさえも。散文の内容は、文学概念の定義にほとんど係らない。ドイツ文学についても、およそ同じことがいえる。レッシング Lessing は劇を書いたから一八世紀ドイツ文学の代表的作家の一人なのではない。ニーチェ Nietzsche は散文詩の如き形式を『ツアラトゥストラはかく語りき』に用いたからドイツ文学史の一九世紀後半に重きをなすのではない。ゲーテ Goethe の全集は、詩と劇と若干の小説のほかに、藝術・哲学・自然科学の領域にわたる多数の論文を含む。それらの論文が、詩人ゲーテ研究のための資料ではなく、その作品とされるのは、その散文の質による。これが大陸型文学概念の要領である。

イギリスの近代文学史は、シェークスピア Shakespeare 以来の詩および劇に、一八世紀以後の散文小説を加えて、伝記・文藝批評の類を含める。たしかにボズウェル Boswell からニーマン

Newman を通じてウインストン・チャーチル Winston Churchill までは、名文家の文章はその話題の如何を問わず、文学作品として扱われることがある。しかし、ベーコン Bacon とニュートン Newton の著作は、デカルトとパスカルがフランス文学史に占める地位を、イギリス文学史のなかに占めない。彼らの英語がよくなかったのだろうか。しかしジョン・ステュアート・ミル John Stuart Mill からバートランド・ラッセル Bertrand Russell に到るイギリスの思想家たちは、見事な散文を書いた。それでもイギリス文学史の一九世紀はミルではなくてディケンズ Dickens の、二〇世紀はラッセルではなくてジョイス Joyce の世紀である。それは第一義的に、ディケンズまたはジョイスの散文の質の問題ではなくて、彼らが小説を、つまり空想の物語を書いたからであり、その内容がその時代において独創的であったからである。そしてミルは自由について、ラッセルは人間の知識の範囲と限界について、書いたが、空想の物語を書くことが甚だ少なかったからである（彼らはそれぞれ有名な「自伝」も書いた。またラッセルは、少数の珠玉の如き短篇小説も書いた。それはほとんどルキアノス Lukianos の短篇を思わせる諷刺文学の傑作である。文藝批評家または文学史家が、短篇小説作家としてのラッセルに注目しないのは、彼があまりに非文学的な『数学原理』によって、あまりに有名であったからかもしれない）。かくしてイギリス流の文学概念は、文章よりも、主として「ジャンル」（散文の劇、小説、文藝批評、一種の詩的散文）により定義されるようにみえる。そこでは殊に想像された内容（空想の話）が強調され、したがって劇および小説、殊に一八・九世紀以後の文学史の叙述には、小説が重視されるのである。こ